

全体研究

I 研究主題

共によりよい生活を創造する子どもの育成（1年次）

～非認知的能力「目標への情熱」と「粘り強さ」に着目した学びのデザインを通して～

II 主題設定の理由

I 「共によりよい生活を創造する子ども」について

2030年は、現在よりVUCA（予測困難で不確実、複雑で曖昧）な時代となることが予測される。子どもたちは、正解が存在せず、現在の常識が通用しない、多様な考え方や利害がある未知な状況に対応しながら、自分や家族、社会などの幸せへの思いを強く抱き、自ら課題を見付け、他者と関わりながら、最適解や納得解を導いていくこととなる。

OECDの「2030に向けた学習の枠組み」では、個人的にも社会的にも健やかに生きることができるとされる未来の創造を、教育が目指すべき最終目標としている。そして、この目標を達成するために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力の重要性について言及している。（図1）

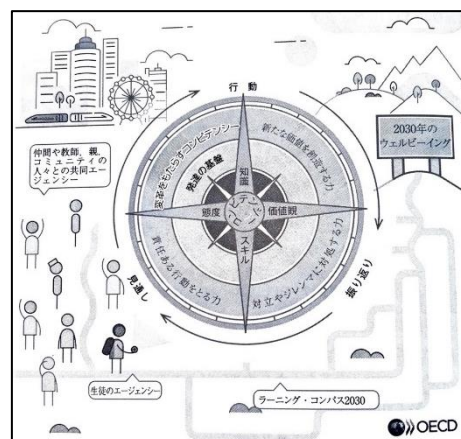
学習指導要領の前文では、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の作り手となることができるようにすることが求められる」と記述されている。

以上のことは、子どもたちが、自分や家族に合った幸せや、社会や自然環境の幸せに向けて、多種多様な生活の中から、自らの進むべき方向を見だし歩みを進めることと、そのために必要となる非認知的能力の重要性を示している。

この重要性を踏まえ、学校教育目標に照らした目指す子ども像を、非認知的能力である「粘り強さ」や「思いやり」、「社交性」等の「学びに向かう力・人間性等」を含み、図2のよう

に捉えている。そして、この子ども像には、自分や他者、社会などにとっての幸せな生活に向けて、自らの進むべき方向を見だし、歩みを進めて欲しいという願いが込められている。

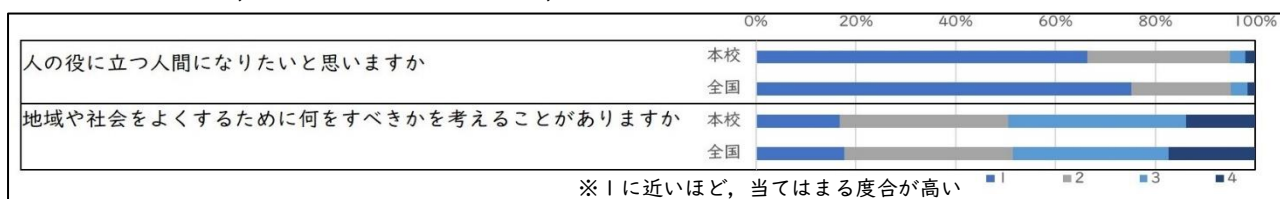
本校の子どもたちは、課題の解決に向けて、学習活動に取り組んだり、友達と話し合ったりすることができる。また、自分や他者、社会などにとっての幸せな生活に関わる、人の役に立とうとする思いや、地域や社会をよくするために考えようとする思いについては、図3に示す実態が見られる。学校教育目標に迫れるように、子どもたち一人一人が、現状からの向上を進めていく必要がある。



＜図1 OECD ラーニング・コンパス2030＞
出典：白井（2020）p.74

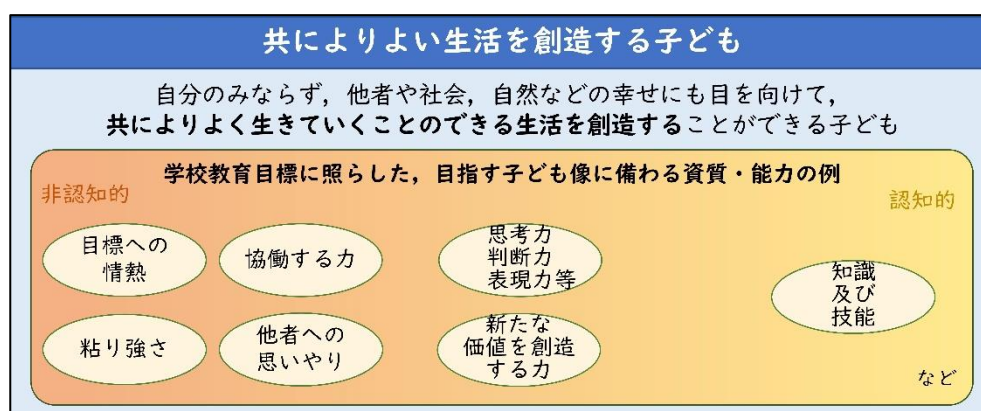
学校教育目標		
つよく	ただしく	かしこく
○目標をもって粘り強く取り組み、失敗をしても挑戦する子ども	○一人一人の思いや考えを大切に、互いに聴き合う子ども	○主体的に学習に取り組む、新たな価値を創り出す子ども

＜図2 本校の学校教育目標と目指す子ども像＞



＜図3 全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果の一部＞

このような背景と子どもたちの実態から、子どもたちには、正解のない未知な状況の中で、自分の生活だけでなく、他者や社会、自然などにも目を向け、自らの手で現状の生活を改善していったと欲しいと考えた。つまり、共によりよく生きていくことのできる生活の創造を目指し、自ら歩みを進められる子どもを育成したいと考えた。そこで、研究主題を「共によりよい生活を創造する子ども」とした。



＜図4 共によりよい生活を創造する子どもの概要＞

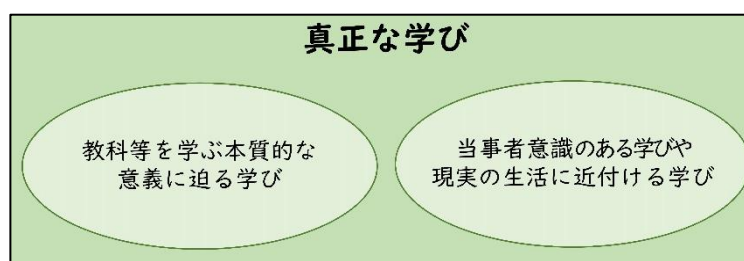
なお、「共によりよい生活の創造」に、学校教育目標に照らした、目指す子ども像に備わる非認知的能力も含めた資質・能力（図4）が必要な理由を（表1）に示す。

目指す子ども像	「共によりよい生活の創造」に、目指す子ども像に備わる資質・能力が必要な理由
目標をもって粘り強く取り組み、失敗をしても挑戦する子ども	・ 共によりよい生活は、自分にとっての生活でもあるため、他者に任せるのではなく、自ら目標を決め、情熱をもって取り組む必要がある。さらに、容易には創造できないため、できないと諦めたり、挫けたりすることなく、粘り強く取り組んでいく必要がある。
一人一人の思いや考えを大切に、互いに聴き合う子ども	・ 共によりよい生活は、他者や社会などを含むため、思いやりをもって、自分の身の回りの存在に寄り添う必要がある。さらに、多様な考え方や利益が存在するため、他者の思いや考えに耳を傾け、協働しながら、納得解や最適解を導く必要がある。
主体的に学習に取り組み、新たな価値を創造する子ども	・ 共によりよい生活は、正解が存在しないため、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を総動員させながら、自ら歩みを進め、これまでの生活にはない新たな価値を創り出していく必要がある。

＜表1 「共によりよい生活の創造」に、学校教育目標に照らした目指す子ども像に備わる資質・能力が必要な理由＞

Ⅲ 本年度研究の方向及び副主題設定の理由

研究主題「共によりよい生活を創造する子ども」を実現するためには、真正な学びが必要であると考えた。ここでいう真正な学びとは、教科等の本質的な意義に迫る学びであり、当事者意識のある学びや現実の生活に近付けた学びとする（図5）。子どもたちは、教科等の本質的な意義に迫る学びの中で、教科等の見方・考え方を働かせる。そして、「共によりよい生活の創造」に必要となる教科等の資質・能力を身に付ける。また、当事者意識のある学びや現実の生活に近付けた学びの中で、自分や他者、生活にとって役に立つ経験を通して、自分にとっての価値や満足感、達成感を感じる。そして、身の回りの存在に対して、自ら関わろうとする非認知的能力も高まる。これらの理由から、真正な学びを前提として本研究を進めていく。



＜図5 真正な学びの構成＞

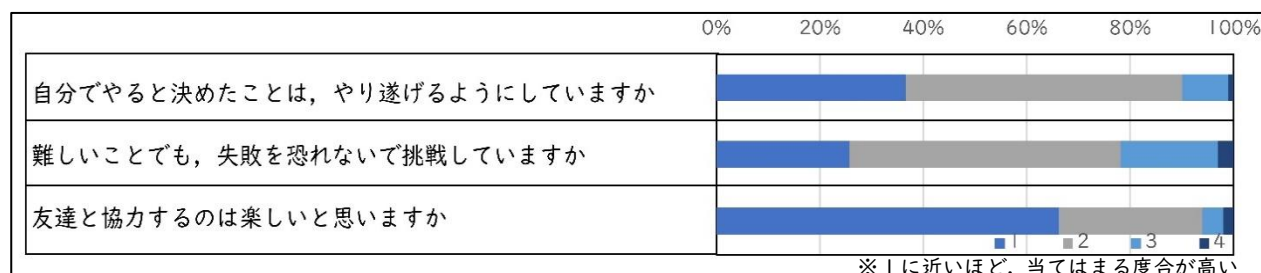
次に、「共によりよい生活を創造する子ども」に照らした、子どもたちの実態を述べる。子どもたちは、友達の考えに耳を傾け、協働的に学ぶことができる一方で、以下の課題となる姿（表2）が見られる。

課題となる姿	考えられる要因
- 途中で投げ出してしまう - 友達と話をしたが、納得のいくまで話し合おうとはしない - 他人任せになってしまう - 一度、考えをだすと満足してしまう	- 解決したいという思いが弱い - 失敗や困難に立ち向かう思いが弱い - 納得解や最適解を導こうとする思いが弱い - 学びを自分ごととして捉えていない - 知識や技能の更新への思いが強い

＜表2 研究主題に照らした子どもたちの課題と、考えられる要因＞

これら課題となる姿の要因を見ると、課題の解決への強い情熱や粘り強さといった非認知的能力が共通の要因として読み取ることができる。

また、全国学力・学習状況調査（図6）の結果からは、「友達と協力することの楽しさ」に比べ、「やり遂げること」「失敗を恐れずに挑戦すること」に関わる項目に課題があることが分かる。さらに、CRTの結果からは、どの学年においても、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」に比べ、「主体的に学習に取り組む態度」の得点率が低くなっている。



＜図6 全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果の一部＞

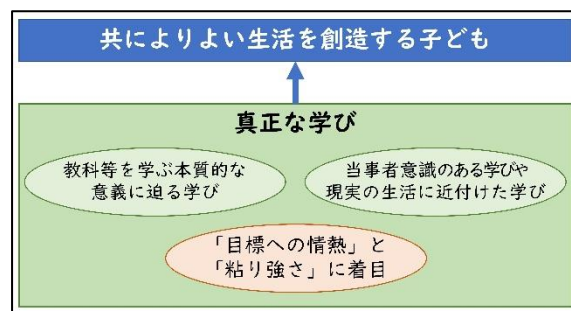
これらの子どもたちの実態から、「共によりよい生活の創造」に向けて、自らの進むべき方向を見だし、歩みを進めていくために必要となる非認知的能力「目標への情熱」と「粘り強さ」を、子どもたち一人一人に応じて育むことが重要であると考えた。

「粘り強さ」については、学習指導要領において、自己調整とともに「主体的に学習に取り組む態度」として、評価することが求められている。中教審「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」の中では、学習評価について、従来から重視されてきた各教科等の学習内容に関心をもつことのみならず、よりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度を評価するという趣旨が強調されており、「目標への情熱」との関連が見られる。さらに、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中では、「正解（知識）の暗記」の比重が大きくなり、「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘も挙げられている。

また、非認知的能力に関わる先行研究の中では、以下のことが述べられている。

- マクレランドの研究では、テストの成績や資格などは、職務上の業績や人生の成功を予測し得えないという。人生の成功に大きく左右したのは、意欲や自制心の高さや感情の自己調整能力といった、非認知的能力であると示されている。
- ダックワースの研究では、成功する人に共通する特徴は「情熱」と「粘り強さ」、すなわち「やり抜く力」であり、IQだけが子どもの優劣を決めるものではないと示されている。

以上の子どもたちの実態と国内の背景、先行研究から、本校では「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に必要な資質・能力の中から、「目標への情熱」と「粘り強さ」に焦点をあて、真正な学びの中で育成を目指すこととした。



＜図7 共によりよい生活を創造する子どもの育成イメージ＞

Ⅳ 研究目標

- ・「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を図るために、非認知的能力「目標への情熱」と「粘り強さ」に着目した、真正な学びのデザインの在り方について、実践を通して明らかにする。

Ⅴ 研究課題

- ・問題解決的な学習において、「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿は、どのような姿か。
- ・「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮されるまでの、学びのプロセスを生み出す真正な学びのデザインは、どのようなものか。

Ⅵ 研究内容

Ⅰ 各教科等における真正な学びを再考する

「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を図るために、各教科等における真正な学びを再考する。真正な学びを再考する際には、以下の手順で行う。

- ①「共によりよい生活の創造」と、教科等を学ぶ本質的な意義との関係を見直す
- ②教科等を学ぶ本質的な意義に迫る学びとなっていることを見直す
- ③思いや願い、必要感、困り感、切実感など、当事者意識のある学びや、現実の生活に近付ける学びとなることを見直す
- ④再考した真正な学びの中で、見方・考え方を働かせていることを確認する

2 各教科等の問題解決的な学習において、「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿を捉える

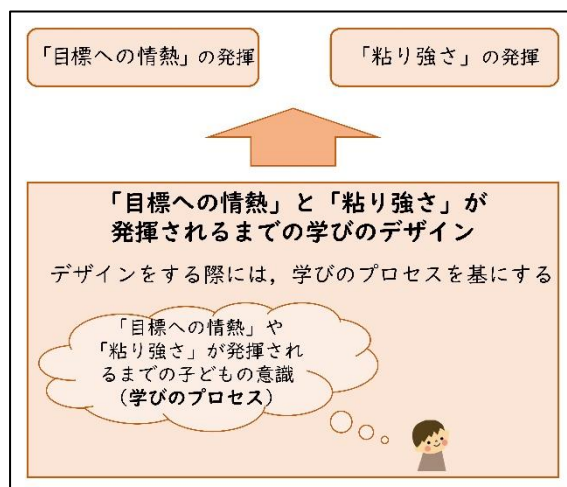
「目標への情熱」と「粘り強さ」を育成するためには、問題解決的な学習において、それらが発揮する姿が繰り返し現れる必要がある。そこで、まず「目標への情熱」や「粘り強さ」が発揮された姿の具体を明確にする。なお、これらの姿は、行為のみに限らず、笑顔や真顔といった表情も判断の一要素となり得る。また、「真正な学び」を前提としているため、「目標」は教科等を学ぶ本質的な意義に迫る子ども自身の目標とする。

- 「目標」 … 教科等を学ぶ本質的な意義に迫る子ども自身の目標である。
- 「目標への情熱」 … ①自分の思いや願い、必要感、困り感などを基に、目標を自分ごととして捉え、笑顔や真顔で取り組んでいる姿。
②目標に向かって、没頭する姿。
- 「粘り強さ」 … ③悩みながら取り組み続ける姿。 ④試行錯誤している姿。
⑤手を止めているが真剣な表情をしている姿。
⑥自分の考えを見直す姿。
⑦他の考えを模索する姿。
⑧目標の達成状況を判断する姿。
⑨自ら学習記録を見返したり、友達と相談したりする姿。

3 「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮される学びのプロセスと、そのプロセスを生み出す真正な学びのデザイン

(1) 学びのプロセスを捉える

学びは連続的であり、それぞれの学びにはつながりがある。このような学びの中で現れる子どもの姿には、その姿に至るまでの子どもの意識が存在する。そのため「目標への情熱」と「粘り強さ」が繰り返し発揮されるまでの意識の過程である、学びのプロセスを捉えることが欠かせない。そこで、「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮されるための要因を仮定し、子どもの視点に立って学びのプロセスを捉える。学びのプロセスを捉える際には、「自分にとっての価値と期待値（達成可能性）はあるか」という「目標への情熱」に関わる側面と、「活動が止まりそうな状況の中で、やり続けることができるか」という「粘り強さ」に関わる側面の両面から要因を仮定することとする。



<図8 学びのプロセスと、学びのデザインとの関係>

(2) 真正な学びのデザインをする

「目標への情熱」と「粘り強さ」が繰り返し発揮される学びのプロセスを基に、真正な学びのデザインをする。学びのデザインをするとは、子ども中心の学びが生まれるように、環境や活動を設計することである。

・環境を設計する…子どもの周囲（人、もの、こと）

人 → 友達、教師、専門家

もの → 座席配置、掲示物、動線を考慮した場づくり、道具、材料、学習プリント

こと → 取り出しやすい情報の中身（質や量）、十分な時間、学習風土

・活動を設計する…単元・題材等の構想（課題、学習活動）

①教科等を学ぶ本質的な意義に迫る学び

真正な学びを実現するために、教師と子どもたちが、一緒に教科等を学ぶよさを考える機会を設ける。子どもたちが教科等を学ぶよさを自覚することで、単元・題材等のゴールイメージが明確になること、価値ある学びとして自ら歩みを進められるようになることが、期待されるからである。教科等を学ぶよさを考える機会は、以下のとおり設定する。

①研究当初において、教科等を学ぶよさについて話し合う。

②単元・題材等の終末や学期末において、①の教科等を学ぶよさを改めて話し合う。

次に、各教科等部では、再考した真正な学びが生まれるための課題を設定したり、学習活動を工夫したりするなど、真正な学びのデザインを行っていくこととする。

②当事者意識のある学びや現実の生活に近付ける学び

真正な学びを実現するために、子どもたちの思いや願い、必要感、困り感、切実感や、子どもたちの生活に即した課題意識など、学びの具体的な文脈や状況を重視したデザインを行っていく。

(3)「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮される学びのプロセスを基にした、真正な学びのデザイン例

「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮される学びのプロセスを取り入れた、真正な学びのデザイン例を図9に示す。

単元・題材等，時間の尺度が長い	単位時間の時間の尺度が短い
【課題設定】 ・子どもが乗り越えたい，没頭したい課題 ・課題の達成実現度50％と感じる課題 ・すぐには解決できない課題 【単元・題材等のゴールイメージ】 ・教科等を学ぶよさを含みこむ ・学びの達成状況の明確化 【子どもの意識のつながり】 ・学習活動間のつながり 【自己決定】 ・活動の選択	【本時のゴールイメージ】 ・学びの達成状況の明確化 【自己決定】 ・自らのめあての決定 ・解決方法や道具の選択 【学習環境】 ・失敗を許容できる友達 ・グリットの強い友達との班編成 ・失敗を許容できる道具や材料 ・教師からのフィードバック（行為＋その価値） 【振り返り】 ・成長，自信，満足感，達成感，一体感の自覚を促す視点 ・学びの価値を感じる視点 ・学び方の価値を感じる視点

<図9 真正な学びのデザイン例>

なお，各学級では，成長型マインドセットを意識して，日々の指導にあたっていく。